

# 同窓生たより

▼通学▲

モンゴル・シャツタル

(将棋)



佐々木 数 隆

帰国数週間前、ようやく待ち望んでいたモン

ゴル将棋を手にした。遙か遠くチャハル(現内モンゴル自治区シリンゴル盟南部地方)から小さな木箱に詰められた三十二個の駒、色を施した彫刻の木偶である。多くのモンゴル人達が使ったのであろうか色褪せている。駒はモンゴル独特の彫である。暫く眺めて私は大満足であった。

そもそもモンゴル将棋の事など知らなかった私が偶然友人宅で『モンゴル将棋の勝負』と題する本を見たのがきっかけとなり、何とか一組日本に持ち帰りたいと思い呼と浩特市内を捜すこと数十回。しかしいつもあるのはチェスの駒と中国将棋だけである。そこで世話好きで気の良い友人ソヨルト君に是非にと



モンゴル・シャツタル(将棋)の駒

言ってお願  
いした。彼  
は早速故郷  
に手紙を書  
いてくれ、  
取り寄せて  
くれた将  
棋、これが  
今私の手元  
にあるモン  
ゴル将棋の  
来歴であ  
る。

モンゴル  
人はモンゴ  
ル将棋がチ

ェスと似ていると言う。なるほど駒の数や駒の動き方等似ている様である。六十四目の将棋盤。駒は六種類—二個のノヨン(領主)、二個のバル(トラ)、四個のテメー(ラクダ)、四個のモリ(馬)、四個のハンガイ(馬車)、十六個のフー(子供)の合計三十二個である。この内バル、テメー、モリ、ハンガイの駒を総称してボッド(牛・馬・ラクダの家畜を意味する)と呼ぶ。駒の名称と彫刻の形は一致し

ているが、若干の相異もある。フーは相撲姿や競馬姿の子供が一般的だが、私の駒は鳥とウサギの彫刻である。面白いのは、例えばモリの彫刻をアジラッグ(三歳以上の種馬)、アグタ(去勢馬)、オナガ(一歳未満の子馬)グー(雌馬)のどれか一種類の形で彫刻するという。

勝負は先に相手のノヨンを王手詰めにした方が勝となる。そして一度勝敗を決した後、盤上に残った駒を使って再度王手詰めを行う。これを「テウヘイ」と言い、モンゴル独自の競技法とのこと。つまり勝者側にバルと二個のフーが残っているとこれらの駒を使って敗者側のノヨンを王手詰めすればよい。この例は「バルの二テウヘイ」と呼ばれ、四種類の決まり手がある。この様に必ずボッドとフーの組合せによって敗者側を王手詰めする。組合せⅡ決まり手には百通り程ある。ではなぜ「テウヘイ」をするのか。対戦する両者の力の相異を見るためとか。モンゴル人はこの「テウヘイ」をモンゴル将棋の芸術的一特色といっている。

最後に私自身の対戦成績は全戦全敗のまま内モンゴルを去った。次回訪蒙する時こそ一勝せんと思ひチャハル出身のモンゴル将棋を眺めつつ必勝法を思案している。

(昭和五十二年三月文学研究科修了)